

## 「母さんのお弁当箱」

植木 涼太

ぼくは、パンとごはんのどちら派かというところ、ごはん派だ。父があまりパンを好まないため、必然とごはんが食卓に並ぶせいもある。そんな両親の古風な考えはお弁当にも反映されていて、運動会、遠足にはザ・お弁当と言えど定番メニューが入っています。ウインナーに玉子焼き、からあげ、サケのおにぎりなど。

毎回毎回同じメニューなのでぼくは母に、

「はずかしいよ。一度でいいからキャラ弁作ってよ。」

と言いました。周りの友達や華やかなお弁当がうらやましかったのです。サンドイッチのロールまき、焼きそばをアレンジした物など、見たこともないメニューが本当にまぶしかったのです。母はそんなぼくに悪いと思ったのか、次の行事からキャラクターらしきおにぎりをお弁当箱に入れてくれました。ここから母の「ゾンビ弁当」が始まりました。

そのキャラクターらしきおにぎりは、きつと初めは上手に出来ていたのかもしれない。しかし、ぼくは登校に数十分間歩かなくてはいけない。なんい度の高いキャラ弁は母にとって、きつとつめ方のわからない物だったのでしょう。パカッとフタを開けた時には、

「ギヤー！！」

と声が出そうなほど大変なことになっているのです。パンダらしきおにぎりの目がどこかにいってたり、時にはケチャップで出来た口が口さけになっていたり、本当にひどいじょうたいです。最初は急いで作っているのかな、時間が無いのかなと思っていました。友達に見せるのははずかしいとも言いたいくらいでした。でも、夜中に明日の行事が楽しみで目が覚めた日にその気持ちはなくなりました。こっそり明かりのついた台所をのぞくと、のりを切ったりしてレシピ本をのぞくがんばる母の後ろすがたがありました。小さな弟妹のお世話でくたくたのはずなのに、決して器用とは言えない手でがんばっていました。ぼくはこの後ろすがたを一生忘れないでしょう。

ぼくはそれから母の作る「ゾンビ弁当」が楽しみになりました。目が左右曲がっていても、口がどこかになくなってしまっても、ぼくのお弁当箱の中には愛情がいつぱいつまっています。ぼくの苦手な食べ物も入っていたりするけれど、それも栄養を考えしてくれたやさしさだと気づきました。

空っぽのお弁当箱は、

「母さん、おいしかったよ、いつもありがとう。」

のぼくからの気持ち。そう、母さんのゾンビ弁当が日本一！ いや世界一大好きだ！

評価のポイント

ユーモラスで表現が優れており、状況やお母さんの一生懸命さが伝わってくる。